

Knight's Demi—
Human 多種族のいるフ
レメヴィーラ王国

ペットボトム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ナイツ&マジックのフレメヴィーラ王国がモンスター娘のいる日常みたいな多種族
のいる社会だったなら?という妄想が思い浮かんだので、書いてみました。

*エル君のモン娘ハーレムとか、モンスター娘の日常とのクロスオーバーとかではあ
りません

目

人馬騎士とオルター兄妹
テレスターとヘルヴィ先輩

次

9 1

人馬騎士とオルター兄妹

地球の日本で生まれ育つた魂を持つ転生者、エルネステイ・エチエバルリアは激怒していた。

それは。この世の不条理という物に打ちひしがれている双子の幼馴染、アーキッド・オルターの悔しげな表情と、その妹アデルトルート・オルターの涙を見たが故であつた。「ど、どうして……どうしてキッドとアディが騎操士学科に入れないんですか、父上、お祖父様!? 酷すぎます！」

「え、エル……」「エルや。許しておくれ。これはワシにもどうすることも出来ない問題なんじやよ……」

今まで見たことのないような憤怒の表情を見せる少年の姿にたじろぐ家族の顔は、罪悪感でいっぱいといった様子だ。

それを見かねたアーキッドが声をかける。

「エル、俺達のために怒ってくれるのは解るし、気持ちは嬉しいけどさ。残念だけどこればっかりはしようがねえよ。だつて俺達は……」

アーキッドは自分と妹の“下半身”を指して、こう続けた。

「だつて俺達はケンタウロスだもの。そもそも幻晶騎士の操縦席には座れねえよ」
オルター兄妹の下半身は、彼ら自身の髪の色と同じ、鴉の羽を思わせる光沢を湛えた
美しい黒毛に覆われている。

そして、蹄の生えた四脚も備えていた。臀部には尻尾まで生えている。それはもうどうしようもなく馬であつた。人間の上半身が馬の首に当たる部分から生えているのだ。

そう、彼らオルター家はケンタウロス族の血を引く民なのだ。

このフレメヴィーラ王国は、セツテルンド大陸にかつて存在した超巨大国家「ファ
ダーアバーデン」の人々が、大陸の東側に存在する魔獸達の巣窟「ボキューズ大森海」の
一部を切り開いた土地に入植し、ファダーアバーデンの崩壊と共に独立し、建国された
という歴史を持つ国。

だが、大陸の西側に存在する解体されたファダーアバーデンの末裔である国家群と、
フレメヴィーラ王国には決定的な差がある。それは未だに魔獸の脅威に晒されている
という過酷な国情と、構成種族の違いだ。

西側諸国は人間とドワーフ（実はアールヴという種族もいるが一般には知られていない）によつてのみ構成された国。

フレメヴィーラ王国は、その2種類に加えてボキューズ大森海に元々暮らしていた
様々な特徴を備えた「多種族」を国民として抱えている。

この王国は、魔獸達から奪い取つた土地を切り開くと共に、そこに住んでいた人間同様の知性を持った多種族との交流を行い、やがて彼らを同胞として迎え入れる事を選択した国家なのだ。

故に西側諸国からこのように呼ばれている「魔獸番」と。

魔獸というのは、魔法を使う巨大な獣であり、人類の天敵となる巨大な生命体の総称であるが、この場合の魔獸というのは、彼ら多種族を差別する意味も含まれている。西側では彼らは受け入れられていないのだ。

「ですが、フレメヴィーラにおいて多種族を差別することは、禁忌とされていることですよ!? この国の学舎において、あなた達の職業選択に制限を設けるようなことを許していいわけが無いでしょ!」

「いや、だから・・・・人間の姿を真似して造つてある幻晶騎士に、俺達多種族が乗つても操縦できないだろ? 爺ちゃんたち困つてんじやん。もう、その辺にしどうぜ」

幻晶騎士。人の形を模した巨大な魔法で動く機械兵器だ。太古の昔から、巨大な魔獸が跋扈していたセツテルンド大陸において、貧弱な人類が開発した、魔獸と対抗できる唯一の力。

国防の要であり、国家運営の基礎となつてゐる巨大兵器だ。その操縦者である騎操士と呼ばれている人間は、東西を問わず尊崇を持つて語られる。

この兵器の操縦資格は各地にある学園において設けられた“騎操士学科”を卒業することと、人間と肉体的な構造が変わらない事。つまり、2本の脚と2本以上の腕を持つた人型種族であることだ。この用件を満たせない多種族が多い。

だが、ただそれだけを持つてして、この国において多種族が差別されていると考えるのは早計であろう。現に多種族の特性に合わせた様々な職業斡旋が行われており、各々がその才能を活かせる様に関係各所は配慮している。

オルター兄妹も、ケンタウロスとしての能力を最大限活かせるように、騎操士学科とは別の「騎兵学科」に入学させるという配慮が為されている。二人はその脚力を活かした有能な騎兵として見込まれているのだ。

だから、アーキッドは自分達が差別されているなどとは言えなかつた。ただ、親友と同じ学科で学べないことが寂しいと感じただけなのだ。アデルトルートが泣いてしまつたのだけ、学科が違うと離れ離れになつてしまふと、早とちりしてしまつたからだろう。

学科が違っていても、友達で無くなるわけではない。進む道が違つても、関係は変わらない。プライベートではまた一緒に遊べばいいのだ。キッドはそう自分に言い聞かせていた。心の奥に宿っている悲しみを隠して。

しかし、エルネステイはそんな親友が心の奥底に抱いている悲しみをほぼ正確に見抜

いていた。それを察しているからなおの事、許せなかつたのだ。

この不条理な“ルール”が。

「いいえ、騎操士という地位は、幻晶騎士という存在は、”皆に拓かれたもの”でなくしてはなりません！多種族にその門徒を閉じるなど言語道断です！……決めました」
一拍の後、エルネスティは一つの決断を告げた。その言葉は、”日本人としての良心”が“口ボットオタクとして愛”が“親友への友情”が“多種族への憧れ”が言わせた台詞だつた。

「多種族でも操縦できる幻晶騎士を僕が必ず創ります。幻晶騎士をこの世の全ての“人が手に出来る権利を持ち得る存在にして見せます！唯一つの例外も認めない！それこそが僕がこの世界に生れ落ちた理由に違いないのですから！」

この時はその言葉を聞いた全ての人物が、“戯言”と受け取つた。しかし、彼の言葉は幾年かの時を経て現実になつてしまつたのだ。それはエルネスティ・エチエバルリアが、その前身となつた「倉田翼」が、持つていた狂おしいほどの“愛”故の結果であつたと思われる。

「さあ、キッド。アディ。乗つてみてください。僕の設計した幻晶騎士ツエンドルグです！かつこいいでしょ？頑張つて造つたんですよ。ぜひ感想を聞かせてください」

幼馴染の弾んだ声がライヒアラ騎操士学園の整備場に響き渡るのを、呆けた表情で聞いているオルター兄妹。

「ま、まさか本当に創っちゃうなんて・・・・・・え、エル君・・・・あのときの言葉、本気だつたんだ・・・・・・本気で私達のために・・・・・・？」

自分達ケンタウロスを模して造られた雄雄しい巨大な“人馬騎士”的姿を見て、アデルトルートはただただ涙を流していた。それは金属と魔導で形成された自分達に向かられたメツセージ。“存在の肯定”だった。

いくら平等だと声高に叫んだ所で、自分達多種族と人間の間には厳然とした壁が存在している。

多種族間での結婚は禁じられてはいないが、種族の習慣や精神性の違いから推奨されではいない。

それを自分達は嫌というほど味わった。他ならぬ自分の生家という場所で。

アディとキッドは、セラーテイ侯爵の諸子だ。公職家の頭首であり、父である人間、ヨアキム・セラーテイはケンタウロスである母、イルマタル・オルターを愛妾として迎え入れたが、彼の本妻は多種族である母と自分達を「汚らわしい馬つ面」などと罵倒するひどい人物であった。

本来、そのような言動はフレメヴィーラ王国においては禁忌とされているが、ヨアキ

ムは本妻の実家に配慮してなのか、注意はするがそれを持つてして彼女を弾劾するようなことはしなかつた。

そして、嫡出子である三人の兄妹の内、これに便乗する奴がいた。次男のバルトサルだ。彼が歪んだ選民意識から来る罵倒と暴力をぶつけてくるのにイルマタルとその子供達は耐えるほか無かつたのだ。

唯一、長女のステファニアだけが涙を流して、自分の親兄弟の理不尽な仕打ちを詫びたが、この事がオルター兄妹の心に深い傷となつていくのを止められるものではなかつた。

それ故にアディとキッドは“多種族”と“非嫡出子”という二重の劣等感に苛まれ続けていたのだ。

だが、彼らの幼馴染は二人の心に菓食う“劣等感”という魔獸に、幻晶騎士で敢然と立ち向かい、これを打ち滅ぼしたのだ。

「わ、私達…………エル君の側にいていいんだよね？種族が違うからって、遠慮なんかしなくともいい。エル君はそう言つてくれるんだよね、キッド？」

「あ、ああ。俺達の心の中にいた魔獸をエルは倒しちまつたんだ。あいつはずつと闘つてくれてたんだ。こいつを創るつて形で……」

震える声でそう問いかける妹に応える兄の声もまた涙で震えていた。

アデイは自分の心の中に抱いていた仄かな思いが、熱くて強い愛情に変わっていくのを自覚していた。キッドも同じ気持ちだろう。

「私は……あなたに一生ついて行く。エル君……大好き……」

これ以後、エルネスティ・エチエバルリア率いる幻晶騎士開発者集団「銀鳳騎士団」の手によつて、数多くの多種族対応型の非人型機体がフレメヴィーラ王国に齎され、多くの多種族騎操士が輩出された。

それらは人型に負けない……いや、場合によつては凌駕する働きで持つて多種族の能力が人間に劣らぬことを証明していくた。

団長のエルの愛機、鬼面六臂の異形の幻晶騎士イカルガの傍らには、いつも2体の下半身が人型をしていない騎士の姿があつたという。彼の言つたとおり、幻晶騎士を遍く全ての種族の物と為すために。その日が来るまで彼らの“闘い”は終わることは無いのだ。

テレスターとヘルヴィ先輩

「シリエット・ナイト

「幻晶騎士の背中に、腕を増やそうかと考えてるんですよ、親方！」

「あん？ そりや多腕型種族の真似するつて言うことなのか、銀色坊主？」

目の前の小柄な美少女のような少年、エルネスティ・エチエバルリアから放たれた本

日“二度目の提案”。

この提案に困惑した表情を見せているのは、ライヒアラ騎操士学園の学生鍛冶師、ダーヴィツド・ヘプケン。

彼は小柄な成人男性のような容姿をしているが、それは彼らドワーフという種族が人間に比べて背が低いが、体毛が濃くなりやすく、筋肉が発達しやすい性質を持つ故であり、彼自身は来年で卒業してしまうが、学生だ。

あまりにも貫禄があるため、その鍛冶師としての技術力に対する信頼と相俟つて、皆に「親方」と呼ばれて、慕われている男。

そのダーヴィツドは、エルネスティが決して荒唐無稽な事を、何の根拠や当てもなく口にしている訳ではないことを理解している。

幻晶騎士の歴史を大きく塗り替えかねない大発明品、新型アクチュエーター

ストランド・クリスタルティシュー

「綱型結晶筋肉」の提案を、理路整然と説明して自分達を納得させ、驚愕せしめたからだ。

だが、エルの2つ目の提案は、1つ目の提案以上にダーヴィット達、騎士鍛治師の胸中に大きな違和感を抱かせる物であつたのだ。

「ちよつと、エル君。腕を増やすなら背中なんかに増やすんじやなくて、私達みたいに腰にやつてくれるどありがたいんだけど？」

エルの提案を聞いて、現在改修中の幻晶騎士「トランドオーケス」の女性騎操士、ヘルヴィ・オーバーリが抗議して來た。『上半身にある肩から生えた腕と、下半身の腰から生えた腕を組んで』

フレメヴィーラ王国に多く住まう多種族の中には、人間と同様に幻晶騎士の操縦資格を獲得することの出来る種族もいる。ヘルヴィもそう言つた種族の一つ。「アシユラ」という多腕型種族なのだ。

エルはアシユラという名前を聞いたとき、その前身となつた地球人「倉田翼」の魂があるする、地球の神話や創作物の記憶から、彼らの腕は背中から生えている物だと思つたものだ。

だが、フレメヴィーラに住まうアシユラ達は、どうやらケンタウロスと同じ『下半身に4本の脚をもつた靈長類』から分岐進化したものらしく、人間で言えば骨盤から生え

ナイト・ランナー

た脚とは違う2本の肢が、2対目の腕として機能している生き物だつたのだ。

彼らは2対目の腕も人間の腕と同じく器用に動かせるが、それ自体は日常生活では便利でも、幻晶騎士の操縦には役に立たない物だつた。

幻晶騎士はある程度規格を定めて量産される機械兵器だ。国王や騎士団長などの身分の高い人の為に作り出す専用機ならともかく、一部の種族の為だけに大多数を占める“人間の騎操士”では使えない機能を追加することは認められない。

もつとも、その機能の戦略的な価値が、一般機を凌駕しているような特殊なもの”ならその限りではないが・・・・・。

だが、その時のエルの考えている物は彼ら多種族を“特別扱いする為の物”ではなかつた。

「ああ、ヘルヴィイ先輩。腰に腕を増やすのも素晴らしいアイディアなんですが、それだけだと、僕達人間が操縦する時に機能しないパートになつて、死重量デッドウェイトにしかならないんですよ。だから・・・・・・」

「いや、その理屈だと背中に腕を増やした所で、どの道死重量になるだろうが！おめえは何を言つてるんだ!?」

どう考へても破綻しているとしか思えない理屈を展開するエルに、思わず怒鳴るような声でつつ込みを入れるダーヴィット。

だが、エルの言葉には続きがあつた。

「混乱させてごめんなさい。でも、最後まで聞いてくださいね？この追加搭載する2対目の腕の事を補助腕サブアームと呼称しよう。これで握った魔導兵装シルエット・アームズを操縦席に備え付けられた幻像投影機ファイヤコントロール・システムに表示される照星レディックルと連動するよう設計しておけば、人間でも簡単な操作で副腕で握った魔導兵装の狙いをつけることが可能になります。このシステムを火器管制装置パックウェポン、背中側で扱う魔導兵装を背面武装と呼ばせてもらいますが、このような装備を用意しておけば、単純な攻撃力の上昇というだけではなく、即応性の上昇や法撃をしながらの格闘戦だつて可能になるでしょう？」

これこそが本日二度目の“革命”であつた。彼の語る言葉は、その一つ一つが幻晶騎士という概念をバラバラに分解した後、再構成させる魔法の言葉だつたのだ。今までの常識を盛大に改造していく少年に、騎士鍛冶師の面々はある種の畏敬にも似た念を抱く。

しかし、その中にあつてヘルヴィだけはなんだかちよつと寂しげな表情を見せていた。

「うん、すごく高性能で便利な機能が追加されるつて言うのは解るし、私達にも使えそうだから嬉しいけど、結局私達“アシユラの腕”は幻晶騎士の操縦には役にたたないのよねえ。そこはちょっと残念かな」

その言葉を聞いたエルは、キヨトンとした顔でこう返した。

「いえ、僕はさつき“腰に腕を増やすのも素敵なアイデイアです”と言つたでしよう？腰にも腕は生やしますよ。もつとも全ての機体にという訳にはいきませんけど……」
それから彼はまたも語つた。多種族のもつてている個性を、幻晶騎士という工業製品の量産性と汎用性を殺すことなく、簡易な変更で最大限活かせるような設計を行なうという思想を。

それは彼の前世、地球ではこのように呼ばれている理念であつた。“ユニバーサル・デザイン”と。

演習場に駐機している幻晶騎士「テレスター」。幾度かの模擬戦や試験でブラッシュ・アップが図られた試作型幻晶騎士は、その機体に施されたエルと騎士鍛冶師の考えた新機能を試すべく、今日も多腕の騎操士ヘルヴィイを乗せて、試験を開始する。

「まずは背面武装ね！」

ヘルヴィイの操作に応えて、幻像投影機に照星が浮かび上がると、背中に追加された2本の腕が、その手で掴んだ魔導兵装を、照星に連動して調整していく。

「発射！」

操縦桿に追加された引き金^{トリガ}を引き絞ることで、ヘルヴィイが機体の魔力を背面武装に流

し込む。爆炎の基礎系統に連なる魔法の刻まれた魔導兵装は、空中に巨大な火球を生み出し、それを照準された目標に向かつて撃ち放つ。

目標となつている木の板に、火球は見事命中し、テレスターの背面武装が正常に機能していることを示した。

「命中！ここまでではいつも通り……魔力貯蓄量は大丈夫よね？ 以前、これを切らして酷い目にあつたわ……」

以前行つた模擬戦でヘルヴィイはテレスターと共に、学科最強と言われている幻晶騎士アールカンバーと、その操縦者であるエドガー・ブランシュの前に敗れた。

理由は荒削りな操縦系統ゆえに、綱型結晶筋肉の持つ凄まじい収縮効率と耐久性から来るパワーをそのまま生かした力押しの格闘戦と、背面武装を頻繁に使つた法撃戦を、短時間で連續行使したがために、機体の動力源である魔力転換炉の生産能を上回る魔力を消費して、使い果たしてしまつたからだ。

この経験を基に、エルと親方達はテレスターに魔力をより大きく貯めておける結晶筋肉、つまりはアクチユエーターとしての能力を犠牲にして、キヤパシターとしての能力を追求した触媒結晶である「板状結晶筋肉」を開発して搭載し、稼働時間の延長を図つた。

搭載する量や構造、取り付ける位置について大いに悩んだが、稼働時間の減少そのも

のは現段階では避けられないものとして、あくまで緩和措置と考へて妥協した結果、とりあえずの完成を見た。これは「蓄魔力式装甲」^{キヤバシティ・フレーム}と呼称され、複数建造されたテレスターの標準装備となつた。

だが、これから試す物は「ヘルヴィイのテレスター」にしか搭載されていない機能なのだ。すなわち、自分達「アシユラの能力」を活かす為の新機能。

「これより、側面武装の試験に入るわよ」
サイドウエポン

ヘルヴィイが自分の有する「アシユラの腕」でもつて、操縦席側面に用意されたもう1対の操縦桿を掴むと、腰に付いていた「もう一つの腕」が起動し、その手に握られていた2本の剣を振りかざす。

そう、このテレスターには計6本の腕が搭載されているのだ。

しかも、この3対目の腕は背中側の補助腕とは違い、格闘戦すらこなせるほど十分な量の綱型結晶筋肉を積んだ追加腕なのである。

3対目の腕が使う兵装システム。その名前こそが、「側面武装」だったのだ。

これを取り付ける時、多くの鍛冶師が「こんな物を取り付けるのは、やはり人間が操縦するときの死重量を増やすことにならないか?」という疑問符を浮かべたが、エルはこのように返答した。

「そう思つて、これはアタツチメントとして簡単に取り外すことが出来る様にしておき

ました。人間が操縦する場合は、扱いきれないならはずしてしまえばいいんです

操縦系統の複雑化を招くのではないかとの声もあつたが、

「そういう声も当然あると思って、親方と相談して魔導演算機^{マギウス・エンジン}を含めた操縦席のインターフェイス^{ユニアーサル・コックピット}を根本的に見直した結果、新しいタイプの機体管制システムを設計しました。名づけて『統合制御装置』です！」

今まで鐙や操縦桿の位置は、特定の位置に固定されていて、騎操士の体格を操縦席に合わせるという形式であつた。

しかし、統合制御装置はそんな乗り手を選ぶようなやり方ではなく、操縦席の方を騎操士の体格や種族特性に合わせて追加・調整できるような構造に改めたのだ。魔導演算機にも大幅な変更^{デスマーチ}を加えるはめになつたため、鍛治師もエルも、別学科の構文師候補生達も巻き込んでの死の行軍と相成つたが、なんとか物にできた。

この変更により極端な話では、魔法能力や反射神経は十分だが体格が小さいため騎操士になれないとされていた子供や小柄な多種族であつても、幻晶騎士を操縦できるようになつたわけである。

「いやあ、実を言うとこれが一番造りたかつたんですよね。これで僕も完全制御でなくとも操縦出来る様になりました！やつたあ♪」

開発者の切実な悩みはさておいて、話を試験に戻そう。

「せりやあああ！」

掛け声と共に、テレスターレは標的に肉薄して、上半身にある腕で握った剣と、下半身の腕で握った剣による多段斬りを叩き込んだ。

「よし、追加腕の格闘性能は上々のようね。正直補助腕よりこっちの方が、私達には馴染みがあつて使いやすいわ」

そして、ヘルヴィイが追加腕で握っていた剣を離して床に置くと、もう一機幻晶騎士がやってきて、運んできた魔導兵装を追加腕の方に持たせた。

まだ追加腕の調整は間に合つておらず、巧緻性が上半身の腕と比べて低いため、このような措置が必要なのだ。最終的にはこの辺の作業も、騎操士自身で出来るようにしたいとエルは意気込んでいるが。

「ヘルヴィイ。試験は順調のようだな。そ、その……この前のようにならなくて……安心したぞ」

「う、うるさいわねえ！ その話はもうしないでって言つたじゃない。エドガーのバカ！」
模擬戦の事を未だに気にしているヘルヴィイが、サポート役として傍らに立つエドガーが繰るアールカンバーに向かつて、叫ぶ。

「えへ、お二人とも痴話喧嘩してないで、試験の続きをしてくださいね～」
観覧席から拡大されたエルの声が響き渡り、演習場が笑いに包まれる。思わず顔を赤

らめる兩人。

「わ、わかつてゐるわよ！魔導兵装の試射も始めるわよ！」

皆が見守る中、ヘルヴィのテレスターは追加腕で握つた魔導兵装で狙いを付けていく。

「まずは火器管制装置との連動機能で撃つて見るわね」

先程の補助腕と同様、照星との連動で追加腕が動いて狙いを定める。そしてまたも火球は発射され、標的を焼き焦がした。

これにより、もし人間の中にも「追加腕で側面武装を扱つてみたい」と考えた騎操士が出てきた場合、補助腕と連動して動かすことでならその希望をかなえることが出来る様になつたといえる。

「次はマニュアル制御よ」

照星が消えて、ヘルヴィの“アシュラの腕”と連動してのマニュアル操縦での照準が可能となつた。

「(私たちアシュラは生身では、いつもこの状態で魔法を撃つてるんだ。機能自体に異常が無いなら、これでも命中してくれるはずよ)発射！」

火球は3度目の命中弾となつて、度重なる攻撃ですっかり炭化した標的を爆碎した。観覧席に歓声が起ころ。

予定していた試験は全て消化したので、ヘルヴィイはテレスターの魔力貯蓄量を確認する。

(やっぱり、想定されてたとおり魔力消費量は増えてしまつてるわね。また鍛冶師学科のみんなが調整作業に追われるのかあ……なんか、かわいそうになつてきた)
度重なる調整作業で疲弊している構文師と鍛冶師の面々を思い出して同情を隠せないヘルヴィイ。

そういうしている内に、エドガーがヘルヴィイに労いの言葉をかけてきた。

「お疲れ様、ヘルヴィイ。すごいなテレスターは、従来の機体よりもはるかに攻撃力、汎用性が上昇している。完全な状態とはまだ言えないが、それでも素晴らしい。それはこの間の模擬戦でよく味わつたよ」

「その話はやめてつて言つたでしょ！…………でもまあ、概ね同意するわ。新型機は素晴らしい機体よ。そしてそれを設計したエル君も。…………本当にすごい人」「エルネスティか…………あいつの人間を辞めている域の戦闘能力や魔法能力はたしかに凄まじいものだな。その上、幻晶騎士の設計や、魔導演算機の編纂まで可能にする技術力…………正直、凄まじすぎて理解不能なレベルだよ」

師団級魔獣「陸^{ベヘモス}皇亀」の威容に怯えていた自分達よりも前に出て、それを倒してしまつたエルネスティの繰っていた幻晶騎士「グウエール」の姿を、エドガーは今でも鮮明に

思い出すことが出来る。

その姿は、あの時あれを見た全ての騎操士の脳裏に今なお焼きついているに違いない。

そんな彼が創り出すものと、それが齎す未来が見たい。そう思つたからこそエドガーも、騎操士学園の教師と生徒一同も、開発に積極的に協力しているのだろう。

「それもすごいけどね、エドガー。あの子の凄さは、もつと別の所にあるのよ」「何? どういうことだ?」

しかし、ヘルヴィの抱いたエルへの畏敬の念は、そんな表面的なものだけに向けられているものではなかった。

「あの子は今の幻晶騎士を壊して、その概念をもつと拡げようとしてるのよ。以前、彼に親方が“どうしてそんなに次から次へと、今までに無い新しい物を創ろうとするんだ?”って聞いたことがあったのよ。そしたら、彼はこう答えたわ」

『だつて、今までは不足なのです。幻晶騎士とは“もつと拓かれたもの”でなくてはなりません。全ての種族の持つ可能性を最大限引き出せる懷の深いものでなくてはならないんです。そこでこそ、僕の愛する“ロボット”足りえるですから』

ヘルヴィや親方達は、彼の言つてる“ロボット”という物の意味が解らなかつたが、それは彼にとつて、とても大きくて大切なことだけは、理解した。

そして、彼のその“考え方”も同様に尊ばれるべきものだと、強く思ったのだつた。
「あの子は変えるわ。幻晶騎士だけじやない。この国に暮らす人間や多種族の暮らし、
ひいてはこの世界の有り様もね」

ヘルヴィイが口にした言葉は、そう遠からぬうちに現実となつた。

エルの提唱した新型機に使われている技術は世界を怒涛し、多くの闘いも起こした。
その最中に失われた命や流された血と涙は決して少なくはない。
だが、彼が願つた“全ての人に拓かれたロボット”となつた幻晶騎士は、この国に住
まう多くの人間や多種族の可能性を、大きく広げる希望の光となつていつたのだ。